

「信じる人になりたい」

水谷憲牧師

聖書 ヨハネによる福音書 3章 36節

先日、私自身すっかり忘れていたのですが、ふとしたきっかけで、今月が私の母方の祖母が亡くなってから 20 年経ったことに気がつきました。私の父方は、祖父も祖母ももう私がちっちゃい頃からおりませんで、母方の祖父と祖母に私は結構かわいがってもらっていたんですけども、その祖父ももう 30 年ぐらい前、私が 20 歳ぐらいの頃に亡くなりまして、その約 10 年後にこの祖母がなくなったわけです。

その頃、私は大学を卒業して九州の親戚の家、そこが学習塾をやっておりまして、そこで働いていたんですけども、そこに祖母も一緒に住んでおりましたが、私が仕事をやめて京都に基督教の勉強をしに神学校に行くことになって、まさにその引っ越しの日、荷物を持って出ようかなとしたその時、後ろから服を引っ張る人があるんです。はっと振り返って見たら、祖母が「あんたも体大事にして元気でね」と最後のお別れをしに来てくれたわけです。私も「ありがとう」と荷物を置いて、最後に祖母をぐっと抱きしめてお別れをしたのですが、その時の祖母のちっちゃな背中が今でも思い出されるんです。それからしばらくして祖母は亡くなったんですけども、それからもう 20 年経つのか、とふと思いついたというわけでありまして。

そんな私の祖母の暮らしていた所は、大分県は宇佐市とあって、宇佐八幡宮があるところなんです。そしてその宇佐市の中でも比較的大きな四日市という町に私の祖父母は暮らしていたわけです。その四日市という町は、お寺を中心に栄えた門前町でありました。家の裏手には浄土真宗西本願寺派のお寺があり、祖母はいつも熱心にお参りをし、仏教婦人会という集まりの世話役もしていたようでした。それはもちろん、祖母がまだまだ元気な頃の話で、私は直接そんな姿を見たことはなく、祖母がいつも仏壇に向かって手を合わせる姿しか見ていなかった私には、そんな活動的な祖母の姿というものを、祖母の葬式の際に初めて聞かされて、大変驚かされたことを思い出します。

さて、本日の聖書の箇所は「ヨハネによる福音書」3章 36 節です。これはもう少し前の部分から聖書を読むに、どうやら洗礼者ヨハネがイエスについて証している箇所ようです。さてここでは、「御子を信じる者は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる」とのべられています。御子を信じるとは、イエスを神様によって遣わされた方、

私たちの救い主キリストとして信じるということです。イエスを私たちが救い主であると信じることで、私たちには既に永遠の命が用意されているのであり、私たちは肉体の死をもはや恐れる必要はないのだと。ではそれに対して、「御子に従わない者」とはどのような者のことであるのか。「御子を信じる人は～」に対して「御子に従わない者は～」と書いてますから、「ナザレのイエスのことをキリストと信じない人たち」のことなんでしょうか。そのように、イエスをキリストであると信じない者は、永遠の命にあずかれない上に、神の怒りまでも被ってしまう、ということなんでしょうか。

そう考えると怖いですね。世の中には宗教に不信感を抱いている人々もいるでしょう。もともと宗教に興味を示さない人々もいるでしょう。他の宗教を熱心に信仰している方々もおられるでしょう。私の祖母も、熱心な仏教徒でありましたが、みな永遠の命にあずかれないのでしょうか。まあでもそれはまだいい。それらの方々はみな、天国に行って、永遠の命を与えていただきたいなどと特に願っておられるわけではないからです。ですから、そんな人たちが命にあずかれないというのはまだ理解できるのですが、彼らはそれだけではなく、神の怒りまで買うことになってしまう、となると、ちょっとかわいそうな気がします。私だって、街中で「いらっしゃい、お客さんいかがですか」って声を掛けられて、ああこれおいしそうやな、これは便利そうやな、とかちらっと考えたものの、やっぱり「またにしますー」といって通り過ぎることはあるけれども、そこで「なんで買えへんのや！ もう一生売ったらんからな！」とか怒られたら「ええっ？ なんで怒られなあかんの？」ってびっくりすると思います。

ここでいう「従わない者」という言葉は、「信じない者」という意味ではなく「不従順な者」「服従しない者」という意味です。つまり、ここで神様の怒りを買ってしまう者というのは、イエス様と出会って、イエス様を通して神様とも出会い、その結果神様のことを信じ、イエス様を私たちの救い主キリストであると告白するに至った、それでありながら、それでもイエス・キリストに従っていない者たち、イエス・キリストの教えに従って生きることができていない者たちのこと。そんな彼らを「御子に従わない者」としているのだと読むべきでしょう。

イエス・キリストは私たちにどのように生きよと言っておられるのだったでしょうか。イエス様は私たちに様々な教えを下さっていますが、その多くの教えの基本になっているのは、やはり「マルコ福音書」12:28 以降にあるような「最も重要な掟」についての言葉でしょう。ある律法学者がイエス様に「あらゆる掟のうちで、どれが

第一でしょうか」と尋ねたのに対して、イエス様は「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、私たちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい』。この二つにまさる掟は他にない」と答えました。自分たちの信じる神様を、他の何者にも代えられないただ1人の神様として心から愛していこう。私たちも神様に限りない愛を注いでいただいているのだから。そして神様は私たちがどんな者であろうと大きな愛をもって包んで下さっているように、私たちも隣人を神様が愛して下さっているこの自分と同じように尊い者として愛していこう。神様はこの2つの最も重要な掟を通して、私たちにそう言われているのだと。イエス様はそう私たちに語りかけておられるのです。

また「マタイによる福音書」7章においても、イエスはこのように言われています。私に向かって「主よ、主よ」と言う者が皆、天の国に入るわけではない。私の天の父の御心を行う者だけが入るのである、と。もちろん、様々な苦しみのうちにあって、神様に対して本当に心からすがりつく思いで祈りをささげる方もおられるでしょう。それはそれで大事なことです。問題なのは、「神様、神様」と日ごろから口にし、祈っておきながら、そこで終わってしまっている人、その信仰を神様の喜ばれる具体的な歩みへとつなげられていない人のことです。あるいは、そんな具体的な歩みにはできていなくとも、例えば私たちを愛し、救い上げて下さる神様の御心とはなんだろうか、私たちはそれに対してどのように応えていけばよいのだろうかという問い、というか祈りを持っていない者のことなのかもしれません。そしてそれはもしかすると私たちの姿かもしれません。いつも口だけで「主よ、主よ。神様、神様」って言うばかりで、信仰を具体的な形にできていない、あるいは信仰を具体的な形にどうやったらできるんだらうかっていう祈りすらも、実はあまり持てずに、「まあええか」と思ってしまうような私の姿かもしれません。

仏教の教えは、「仏の教え」であると同時に「仏になるための教え」であるといえます。しかし大乘仏教の精神において、仏教の教えとは「仏になることに執着はせず、私たちは煩惱を持ったまま幸せになれるのだ、私たちはそのままみんな仏であるのだ」という自覚をもって生きるための教えなのだそうです。自分も隣人もみんな仏として敬い大事にし合う姿、自分がありのまま受け入れられることに救いと喜びを見出すだけでなく、そこからもっとお互いにかかわりあってゆく姿です。イエス・キリストの言われていることと重なるところが多いように思います。本当に立

派な方というものは、結局だいたい同じような答に行きつかれるのだろうなあと感じています。私の祖母も、仏教婦人会のお世話をする中できっと豊かな交わりの輪を広げていたことであろうと思うわけです。キリスト教のことは知らなくとも、私が洗礼を受け、また牧師になろうとした時も、祖母は変わらずやさしく、私を見守ってくれておりました。そんな祖母が、西方浄土にせよ天国にせよ、行けないわけはなかろうと私は信じています。そんな祖母のことを、神様は喜びこそすれ「異教の民だ、御子に従わない者だ」といって怒って文句を付けるようなことはきっとなさらないだろうと私は信じています。

御子を信じる者とは、神様の独り子であるイエスのことを救い主であると信じる者のことであり、キリストが命を懸けて教えられたことに従う者のことです。それはつまり、イエスがもっとも大事だと言われた掟、神を愛し、隣人を自分のように愛するということを実践しようとする者のことです。そうやってキリストを信じ、キリストに従うことを通して初めて、私たちは「信じる人」とされるのです。宗教に不信を抱いている者がいるのも、宗教に興味を持たない人がいるのも、神様でもキリストでもパウロのせいでもなく、みな私たちの責任でもあるわけで、私たちキリスト者の姿勢が問われていることでもあります。

「御子に従わない者」とは、宗教に距離をとっている人々でも他宗教の徒でもなく、「神様、神様。主よ、主よ」って口ばかりで具体的に御心を行うことのできない人、別に具体的に御心を行えなくても、「まあええか」と思ってしまった私たちの一面でもあるように思います。弱い私たちではありますが、イエスを信じ、イエスの教えに耳を傾け、もちろんそんなに言われてすぐにうまいことはいかないことも多い、転んだりつまずいたりすることも多いですけれども、それでも一生懸命イエス様に従おう、イエス様について行こうとすることで、本当の意味での「信じる人」となっていきたいと思っています。そしてそんな私たちの姿、「イエス様待ってください」って言いながら一生懸命ついて行こう、従っていこうとする私たちの姿を見て、私たちの子どもたちも育てゆくんだと思っています。

今日は「花の子どもの日」です。信仰をなかなか子どもたちにつなげていくことができないという問題は、今に始まったことではなく、永遠の課題だと思うのですが、やはりそれは、子どもたちが私たちの背中を見て育てている結果が、今こうして出てるのではないかって思うんです。私たちもそのことを改めて考え直して、身を正していけたらいいなと思っています。